慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『首都』 (抄)
Sub Title	Die Hauptstadt (Auszug)
Author	Menasse, Robert 菅谷, 優(Sugaya, Yū)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2021
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.翻訳特集号 (2021. 5) ,p.32- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20210531-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『首都』（抄）

ロベルト・メナッセ
訳：菅谷　優
（東京大学大学院後期博士課程）

» 夢を見ること、それが幸福。待つこと、それが生きること。«

ヴィクトール・ユゴー

序章

豚が走っている。ダーフィット・ド・ヴリアンが住処を今週で一切合切引き払う、その見納めに今一度広場の方へ視線を泳がせておこうと居室の窓を開け放つと、「それ」が目に入った。自身感傷にひたる人間ではなかった。六十年間ここに住み六十年にわたってこの広場を見下ろしてきたのもこれで終わりにしようというわけだ。これで全部、おしまい。これが彼の決まり文句だった――、何かしらを語り報告し証言するときはいつでも二言三言、そのあとに「これで全部、おしまい」と。この文句が彼にとって人生のあらゆる瞬間あらゆる区切りの唯一正当な要約となった。こまごました家財のうちいくつか、彼が新住所に持っていくものは引っ越し会社がすでに回収していった。こまごました家財が所有＝至福諸々(Habseligkeiten)、とはおかしな言葉だが自分には何の関係もない。それから廃品回収会社がその他の物を片付けに来た。鋲釘止めでないものだけでなく、それら鋲釘も引き抜かれ解体され運び出され、残す住居はいわゆる「引き渡し可」、きれいさっぱりの身となった。コンロがまだそこにあって持前のエスプレッソ・マシーンが立っていたうちは、彼は自分でコーヒーを淹れ、作業員たちを邪魔にならないように見やっていた。空になったコーヒーカップをまだ長いこと手中にしていたが、それもしまいにはごみ

袋に落として捨てた。そうして作業員たちが行ってしまうと空の住居が残された。これで全部、おしまい。窓からの最後の一瞥がまだ残ってはいた。知らないものは何一つそこの下にはなかったし、もう引き払わなければならなかった。別の時が当来してしまっていたのだから――そして今彼の目に入ってくるものといえば……、下にいたのは豚一匹である。ブリュッセルのど真ん中聖（サント）カトリーヌにおいて、である。ド・ラブレ通りから当来したものには違いないようで、家の前にめぐらされた現場用の板囲いに沿って走っている。ド・ヴリアンは窓から身をのり出すと、豚が今や右方の角でヴィユ・マルシェ・オ・グランへと幾人かの通行人を避けつつ、一台のタクシーの前すれすれに駆けてゆくのが見えた。

急ブレーキで投げ出されるように前のめり、カイ＝ウーヴェ・フリッゲは座席に落ち戻った。顔をしかめる。遅刻である。イラついている。今度は何だというんだ？実際には完全なる遅刻であったわけではなく、ただ人と会うときはいつでも、特に雨の日は約束の時間十分前にはいることを重視していたのだ。化粧室でこの期に及んで最後の最後身支度を整えるためである。約束をした人物が来る前に雨濡れた髪、曇った眼鏡をなんとかするため――。

豚だ！だんな、今の見ました？タクシードライバーが叫ぶ。車すれすれ前に飛び出してきやがる！ハンドルにかぶさるように身をのり出す。ほら、ほら！あれですよ。

カイ＝ウーヴェ・フリッゲにも見えた。ガラスを手の甲で拭う、豚はわきへ逸れていった。畜生の濡れた肉が街灯の光の中汚らしい赤に照っていた。

だんな、ここです。これ以上寄せれません。まったく！豚めが一匹ほとんど車に突っ込んできやがった。豚（トン）だ目に遭（あ）った、というわけですわ！

フェニア・クセノプルはレストラン・メネラオスの、広場を一望できる大窓から一番目の席についていた。自身あまりにも早く着いてしまっていたことに腹を立てていた。自分がしおらしく待機して坐っているうちに彼がやってくるなんて体面にさしつかえる。イライラしていた。雨で通行止めができては、と不安に思ってしまったばかりに道中をあまりにも長く見積もってしまったのだ。ウーゾ〔訳注：ギリシャ焼酎〕もすでに二杯目。

給仕が自分のまわりをせわしなく行き回るのでスズメバチのようにぶんぶん煩わしく感じられてきた。グラスを凝視しつつ自分ではそれに手を付けないように制止していた。給仕が冷水のデカンターを持ってきた。それからオリーブがのった小皿を一枚持ってきた――そして言った。豚だ！

はい？フェニアは視線をあげる。給仕が固まって広場の方を見やっている、それから自分にも見えた。豚はレストランへ走ってくる、丸々鈍重な体の下であんな短い足をちょこちょこ前後に振った滑稽なギャロップで。犬かと、未亡人らに飼育されているあの好かぬ畜生どもの一匹かと最初はおもったが違う――、そこにいたのはまさに豚一匹。ほとんど絵本から飛び出たかのよう、鼻づらと両耳が線として輪郭として見て取れた、豚を一匹子供たちに描いてやるときはこんな風にやるものだが、これはまるでホラー児童書から脱走してきたみたいだった。イノシシではなかった。泥にまみれてはいたがピンクが一目瞭然の家豚で、何か猛り狂ったもの、威嚇的なものがあった。雨水が窓伝いに流れ落ちていく、フェニア・クセノプルにぼんやり見えたのは、豚が通行人のいくらかを前に急ブレーキをして短い四足を伸ばしきってから身を滑らし、わきへ投身、直角に曲がり地歩をあらたにしてギャロップでサッ、今度はホテル・アトラスの方へと退散していく様であった。この瞬間リシャード・オスヴィツキーはホテルを後にした。エレベーターから出るときすでに、ロビーを横切る間に上着のフードを頭にかぶせていたがいまや雨の中に踏み出す形になった。急いではいた、しかし速すぎず、目立たないように。雨とはありがたい。フード、速足、この状況では完全に普通だし特別目を引かない。男が一人逃げていくのを見た、歳はこのくらい見たかんじ背はあれくらい、なんてことを誰も後になって証言できようもないはずだ。そして上着の色――、それくらいのことは勝手に知っているがいいさ。右へ素早く向き直ったところで猛り混じった呼び声、叫びと奇妙なきしみの喘ぎが聞こえてきた。つ、としばらく立ち止まり振り返ってみた。そこで豚に気が付く。いま見えているものを信じることができなかった。ホテルの前広場を飾る錬鉄の支柱のうちふたつ、現にその間に豚が一匹立っている。うなだれた、牡牛が攻撃に移る前にする姿勢で立っている。なにか滑稽で同時にしかし威嚇的な様をしていた。まったく謎めいている。この豚はどこから来たのかどうしてそ

こにいるのか。リシャード・オスヴィツキーが受けた印象にはこの広場の、すくなくともいま彼が見渡すかぎりのこの広場でいのちがすべで硬直凍結してしまったようであった。畜生の小さな両まなこは微光のうちにホテルファサードのネオンライトを映している——、そこでリシャード・オスヴィツキーは走り出す。右へと駆け去る、もう一度振り返る。豚は鼻をクンクン頭を上に突き出す、後方へ細かく二三歩、それから旋回し広場を横切って駆けていく、フラマン文化センター「ド・マルケン」の前の並木へ向かって越えて行く。この光景を眺めていた通行人たちが目で追っていったのは豚であってフードをかぶった男ではない——そして今マルティン・ススマンが畜生を目にとめた。ホテル・アトラスの隣物件に住んでいた彼は今この瞬間に換気のため窓を開けた。あれは豚に見える、自分の目が信じられなかった。自分の人生について、オーストリア農夫婦の子でありながらいまやブリュッセルに生きて働くに至るあれこれの偶然について思いを巡らせていた最中のこと、すべてが調子はずれでよそよそしく思えてくるそういった気分にはあったが、そこの下の広場で駆け回っている豚、それではあまりにも調子が外れすぎている。そんなものは自分の空想のしわざ、記憶の反映でしかありえない。しかと眺め直す、豚はしかしもう見えなかった。

豚は聖カトリーヌ教会の方へ駆けて聖カトリーヌ通りを横切る。教会から出てくる観光客たちを避けて左へとカーヴ、教会をかすめオー・ブリク海岸通りへと駆けてゆく。観光客たちは笑っていた、ストレスでほとんどもう衰弱している畜生のことをおおむね風習の類、なにか地元ではおなじみの光景だと思っていたのだ。その中でも少なからずの人々が後になって、「これ」に対する説明はないのかと旅行ガイドを探りもしただろうか。スペインのパンプローナでは街路中を、雄牛を数頭追立ててまわる祝日もあるというではないか。すべてを理解できるなどとは思ってもみないところで不可解なものを実際に体験する——そうであればいかに生は陽気なことだろう。

この瞬間グーダ・ムスタファが角を曲がり豚とあやうく衝突するところだった。あやうく。豚は彼に実際触れてはいなかったか、彼の足をかすめて行きはしなかったか。グーダ・ムスタファは動揺して反射的にわきへ跳

ね退きバランスを失って転倒した。水たまりに横たわる体たらく、そのなかでのたうちまわったせいで事は余計ひどくなったのだが、彼が汚れたと感じたのは道脇に溜まっていた泥ではなくて不浄の畜生との接触によってであった。それにしたって実際に接触があったとしての話にすぎないのではあるが。

上から自分の方へ差し伸べられる一つの手が彼の視界に入ってきた。年配男性の顔を見た、悲しみ憂慮する顔だ。雨濡れている。年寄は泣いているように見えた。アロイス・エァハルト教授である。グーダ・ムスタファには彼が何を言っているのかが分からい、ただ「オーケイ」という言葉だけ分かった。

「オーケイ！オーケイ！」とグーダ・ムスタファは言った。

エァハルト教授は話をつづけた、自分も今日転んできたところですと英語でいったのであるが、混乱しているせいで「転んだ（フェル）」いう代わりに「失敗した（フェイルド）」と言ってしまう。グーダ・ムスタファは教授が言うことが分からずもう一回「オーケイ！」と言った。

そこで青色警告灯が到着する。安全。警察。広場全体があたふたし、青色警告灯の中で明滅痙攣する。出撃車両が数台ホテル・アトラスへととどろき急行する。ブリュッセルの空は期待どおり雨を降らせていた。今では降る雨粒も青くきらめき去っていくように見えた。それから今度は強烈な突風――少なからぬ通行人の雨傘は持ち上がり裏返った。グーダ・ムスタファはエァハルト教授の手をとって助け起こしてもらった。父親には欧州に気をつけろと前に言われていた。

第一章　現実に事柄同士のまとまりなんてある必要はなく、かといっていざなくなったらすべてが崩壊するだろう

マスタードを発明したのは誰なんだろう。これは小説の始まりとしては良くない。とはいえ良い始まりなんてありえない、「良い」とか「まぁまぁ」などと言ってみても、そもそも始まりなんてまったくないからだ。考え得る文句はすべて、それですでにひとつの終わりであるから――たとえそれ

がどんどん後を引くものであっても。前史という、幾千もの書かれ得なかったページの末端に、その「最初の」文句は位置する。

いやそもそも小説を読み始めるにしたって、最初の文句めがけてさっとページをさかのぼることができねばならないはず。というのがマルティン・ススマンの夢であった。前史の語り手、というやつに本当はなりたかったのだ。考古学の勉強をやめて、それからようやく——いや、やめておく、関係のないことだ。そんなことではしまいになっても始まりにいたることができない。すべての小説が始まりにあたってぼかしておかなければならない、そうした前史に属することだ。マルティン・ススマンは仕事机についていた。ノートパソコンをわきへのけ二つの別々のチューブからマスタードを皿にしだす、イギリス製の辛いやつとドイツ製の甘いやつを、そこで考える、マスタードを開発したのは誰なんだろう。それ自体ではうまくもないくせに料理固有の味を完全に覆ってしまうペーストを製造しようなんて頓狂な思い付きに至ったのは一体誰なんだろう。これが大量生産品として市場にのこり得たというのも不可思議なことだ。コカ・コーラのようなものだな、と思った。もし存在していなかったら誰も無いことを口惜しがるということがない、そういったものだ。ススマンは帰りに、アンシュパッハ通りにあるデルハイゼの支店でワインを二本、黄色チューリップの束ひとつ、グリル用ソーセージ一本そして当然、マスタードを買った。やはりチューブが二つ、甘／辛のあいだで決め切ることができないからだ。

グリルソーセージの方はと言えば、フライパンの上でシュッと音をたててはじけている。全開の火が強すぎて、脂は燃えついてソーセージは焼け焦げてしまったがマルティンは見もしない。白の皿の上で犬のふんのミニチュア彫刻といった具合の、それぞれ他方にくらべて明るく茶黒いマスタードの二つの輪をただ座って凝視していた。フライパンで焼けこげるソーセージそっちのけで皿の上のマスタードを凝視する、これはまだ専門文献においては抑鬱の一義的で典型的な徴候としては書かれてはいない——、しかしそういうものだと解釈できる。

皿にあけられたマスタード、開け放たれた窓、雨のカーテン。かび臭い空気、炭化する肉の臭い、はじける腸と燃える油のパチパチ、磁器皿の上のふんの彫刻作品——そこで銃声を聞く。

驚きはしなかった。お隣さんでシャンパンの栓が抜かれたくらいに聞こえた。お隣といっても、妙に薄い壁を隔ててあるのはもちろんただのホテルの一室なのである。隣はホテル・アトラス――身をかがめてスーツケースを引きずるロビイストたちがことさら宿泊する、この頼りない施設はなんと婉曲的な名前〔訳注：アトラス＝支える者〕で体(たい)を表していることだろう。ススマンは別に聞きたいわけでもない様々を再三壁を通して聞かされていたがその都度別段気をもむこともなかった。リアリティ番組、もしかしたらむきだしの現実(リアリティ)、いびきやうめき。

雨が強まった。マルティンはもともと家を出たいと思っていた。ブリュッセルに向かって準備万全の体(てい)であった。ウィーンでの送別会で彼は気の利いたプレゼントを受け取っていた。それは彼のブリュッセル行きに備えて選び抜かれたものだった。その中には、九本の雨傘が含まれていた。イギリスのクラシックな「ロング」からドイツの「クニルプス〔訳注：折りたたみ傘〕」、三色ベネトンカラーのイタリアの「ミニ」に至るまで、それに加えて自転車乗り用のレインポンチョが二つ。

ススマンはじっと皿を前にして座ってマスタードを凝視していた。後になって何時(いつ)銃声があったかを警察に正確に答えることができたのは、シャンパンのコルクが「ポン」と鳴ったなと思ってからにわかに自分もワインを一本開けようかと活気づいたという事によっていた。飲酒は毎日なるべく遅くまで先延ばしにすることにしていた、一九時前に飲むことなど決してなかった。時計を見た、一九時三五分。冷蔵庫に向かいワインを取り出す。コンロの火を消す、フライパンを傾けてソーセージをゴミバケツに落とす、フライパンを流しに出し蛇口をひねる。熱いフライパンで水がシューッと音をたてる。ボヤっとしてんじゃないよ！厩舎の豚のエサやりと掃除を手伝いもせずに、本の前に座って何も視界におさめず茫然と目を見開いていると母親に言われたものだ。

マルティン・ススマン博士は座っている、マスタードののった皿を前にワインを一杯、また一杯やりながら窓も開けっぱなしでせわしなく立ってみたりもする。窓の方に行ってちょっと外を覗いてからまたテーブルについた。ワインも三杯目の時、窓から青色警告灯が部屋に入って壁を撫でさする。暖炉上の花瓶に挿したチューリップがリズミカルに青く瞬く。電話

が鳴った。彼は出ない。それから何回か鳴る。ススマンはディスプレイで誰からか確認する。彼は出ない。

前史。それはこんなにも意味を持ち同時に思ってもみないほど揺らめき点滅するもので、ススマンが住んでいるヴィユ・マルシェ・オ・グラン広場の反対側の端にある聖カトリーヌ教会に満ちる永遠の光のようであった。

幾人かの通行人が雨を逃れて教会に入っていた。ふらふらとどうしたものかと立ち尽くし、身廊をうろつく者もいた。観光客はガイドブックをめくりめくり「十四世紀の黒マリア」、「聖カトリーヌの肖像」、「おそらくメヘレンで作られたであろう、フラマンに典型的な説教壇」、「ジル＝ランベール・ゴドシャルルの墓石」等、観光要所を追っていた。

時折落雷があった。

一人で教会のベンチに座っている男は、祈っているように見えた。両肘をつき、からめた両手にあごを支え背を丸めている。フード付きのジャケットを着ている。フードは頭にかぶせてある、ジャケットの背に「ギネス」と無ければ一瞥して僧衣を着た修道僧だと思うところだ。

フード付きジャケットはブリュッセルの雨のせいだとして片も付こう、しかしこの男がこれを着て与える印象はなにか根本的なことをこの男に関して告げてもいた。実際、自己特有の形でこの男は修道僧なのである。この男は修道僧的なもの、もしくは「修道僧的なもの」として自身想像している何か、禁欲、苦行、瞑想して霊行を絶えず混沌と破壊の脅威にさらされている生のただなかの救いと見なしていたのだ。この男にとりそれは教団や修道院、隠遁などとはセットではなかった。誰でも職業や役職に関係なく自分自身の畑で修道僧、自身の使命に全霊をあげる志操高い僕になれる、いや、なるはずなのだ。

責苛まれた男を十字架に眺め死を思うこと、これを彼は愛していた。そうする度に彼の感情は浄化され思考は束ねられ、精は高まるのであった。

これがマテウス・オスヴィツキーであった。パスポートにある洗礼名はリシャードというのであるが。オスヴィツキーがマテウスとなったのは、ポズナンのルブランスキー学園の生徒となってからで、そこでは「蒙を啓かれた学徒」は全て十一の使徒名から一つを添え名として受けることに

なっていた。彼は再洗礼と聖別を受け「収税吏マテウス」となった。神学校からぬけても自分の「戦時名」として保持していた。パスポートを見せねばならない国境ではリシャードとして通っていた。秘密任務の関係では、過去何人かの代理人の発言からマテウスの愛称形であるマテクとして知られていた。同士にもそう呼ばせていた。マテウスとして使命(ミッション)を遂行し、マテクとしてコンタクトを試みられ、網を抜けるときはリシャードであった。

オスヴィツキーは祈っていたわけではなかった。「主よ」で始まり、これこれを成し遂げる「力を与えたまえ」、「祝福を」などという願望にすぎない誦句を黙って組み立てているわけではなかった。絶対的な霊は黙するのみであり、その霊から人が望みうるものは何もなかった。彼は十字架に釘打たれた男を眺めていた。この人間が人類を前に身をもって例示し最後には言葉にもした経験というものは、絶対的なものとの対峙の瞬間において曝け出され委ねられた身の完全なる孤独に関するものであった。肉の覆いが掻き分けられ内側を曝け出され切開され刺し貫かれ引き裂かれるとき、生の痛みの叫びがすすり泣きへ、最後には沈黙に移行するときの絶対的な寄る辺なさ。沈黙においてのみ生は全能なる霊の傍らにあるのであり、その霊ははかり難い心弾(こころはず)みから自分の存在とは逆のもの、つまり時を自らから解き放った者なのである。人間は自分の誕生から遡り、遡り、さらに遠く遡り思いを巡らすことができる、永遠に、永遠にと遡ることができる。それでも始まりに至ることはなく、子供のそれを出ない時間の観念によって感得しうるものと言えばただひとつ、自分は存在する前は永遠に渡って非在であった、ということである。そこから考えを自分の死からはじまって未来に先走らせることもできたが、それも終わらせるには至らずたどり着くのは、自分は永遠にわたって非在であるだろうという認識のみであることは予想された。そうだ、永遠と永遠の幕間劇、それが時(とき)というもの。わめきざわめき、機械の地踏み、うなるモーター、とどろく銃砲、痛みの歓声、猛ってみては浮かれ騙され声々唱和の人の、極微生育環境地球に満ちる不安の、これらすべてがインテルメッツォ。

マテウス・オスヴィツキーは責苛まれた男を観察していた。

今まで祈りのように手を組んではいなかった。今手を交差させ、中関節がきしみ肌が焼け付つくまで爪を甲に食い込ませる。痛みがひとつ感じら

れた、感じる自分より古い痛み。この痛みはいつでも手をもむ動作で呼び寄せることができる。祖父リシャードは1940年の初め、ステファン・ロヴェツキー将軍のもとで対独ポーランド抗戦に加わるため地下に潜った。同年四月には早くも密告され逮捕拷問、その末ルブリンでパルチザンとして公開銃殺されたのであった。当時祖母は妊娠八ヵ月、子は1940年五月キエルツェにて誕生し、父の名を受ける。万が一の親族共同責任の咎めを逃れるためポズナンの大叔父の家に送られる。大叔父はドイツの「民族リスト」にサインをしていた。そこで育ち一六の時暴動を知ることになる。幼いギムナジウム生は反共戦線に加わるためにフランチャク少佐の隊に合流した。サボタージュ活動、後には公安警察密偵の誘拐活動につき、そして、6000ズウォティがために仲間に密告された。共謀に使われていた住居にて逮捕され、ポーランド人民共和国秘密情報機関が所有するどこかの地下室で死ぬまで拷問された。当時すでに花嫁マリヤは妊娠しており、子は1965年二月コジツェ・グルネの村にて誕生し、祖父と父の名で洗礼を受けた。父を知ることができなかった息子が、また一人。母が語ることは少なかった―― 一度きり、「私たちが会っていたのは野原か森の中だった。ピストルひとつ榴弾はいくつか、お父さんは待ち合わせに一緒に持って来ていたの」。

永遠に黙している祖父が一人、永遠に黙している父が一人。ポーランド人は、これはマテクの論なのであったが、いつもヨーロッパの自由のために戦っていた。戦線に加わった者はそれぞれ沈黙のうちに育ち、沈黙の中へと加わるまで戦いぬくのであった。

母は彼を連れて聖職者たちのもとへ赴いた。推薦人を探し推薦状を買い、教会が与える庇護をあてにし、結局彼をポズナンの神学校、同信徒たちのもとにあずけるに至った。そこで彼は人間の肉体の可傷性というものを自ら知ることになる。血は肉の覆いにおさまりゆく際の潤滑油、皮膚は刃が地図を描く湿った羊皮紙でしかなく、口、そして泣きたてる咽喉は、最後の音が途絶え生をつなぐものをただ吸入する器官になり果てるまでに弱音処理される穴というに過ぎないということ。「地下（アンダー・グラウンド）」というもののまったく新しい観念を得ることになったのも同地でのことだ。寄宿生たちはそれぞれ使徒にちなんだ名をお守りとしていただくと、威圧感のあるポズナ

ン大聖堂の地下墓地（カタコンベ）へと連れていかれた。秘密の地下、墓室へと松明の灯のもと明滅発光する石段を越えて地下最下層へと下ってゆく。堀の粗い坑道を最後に通った先のそこは死、そして永遠の生の礼拝堂が陥没したものであった。半円筒の天井の空間が、キリスト歴十世紀血に潤ったポーランドの大地百フィート下の石に穿たれていた。空間正面には記念碑じみた十字架があり、ぎょっとするほどリアルな姿のキリストがかかっていた。うしろには天使たちの浮彫が石壁からこちらに進み出て、もしくは石壁のほうに陥入し突き抜けていくようにも見られた。炎の明滅の中恐ろしく生々しく。その前には聖母が、幼きリシャードがいまだ見たことがないような、どんな教会においても読んだことがある本のどんな挿絵においても見たことが無いような具合のいでたちの。完全に包み込まれた聖母！ケープを一枚身に着けているのだが、額、鼻、口をもそれで覆っており、生地全体の中唯一か細く空いている裂け目からは目だけが覗いていた。眼窩は深く落ちくぼみ死んだようであり、まさしく千年の涙の成れの果てを表しているようであった。これらすべて、祭壇でさえ、この穿たれた地層から出た石と泥炭土を彫り込み形を与えられているようであった。冷たい岩石のベンチの上、リシャード他寄宿生が部屋に入ってくるのに背を向けて十一人の黒い修道服すがたの僧が座っていた。うなだれた頭は頭巾で覆われている。

寄宿生たちは祈り中の修道僧たちの間の中央通路を通って前方キリストの方へと導かれ、そこで十字を切った後、後ろに向き直るよう指示された。リシャードも振り返り、見た。頭巾の下に明滅するされこうべ、僧たちの手中にあると思われていたロザリオは指骨にかかっている。これら修道僧たちの骸骨姿を。

山々の頂より地中地下における方が神に近くあるのだ。

マテウス・オスヴィツキーは指先を何度も額に打ち付けていた。肉によってにぶく荷重された自分、腐敗した自分を感じていた。また、自分の腹腔の中、臍の左下辺りに燃えるものがあるのを感じ取っていた。死が燃えているのだと知る。死は自分に不安をもたらさない。死は不安を取り除いてくれる。

これら修道服すがたの骸骨は、宣教遍歴司教ヨルダネスとポーゼン司教

区創設司教団の骨組みであった。ほとんど千年も前から彼らはここで永遠に黙する祈りの姿勢を崩さずにいる。これら十一体の骸骨の前で寄宿生にはそれぞれ十一の使徒名から一つが言い渡された。十一、ユダは外されたのであろうか？いや。ただ、学童ひとりにペテロの、地上での最初の神の代理人の名を与えるなど不遜であろうというだけだ。選ばれた者はヨハネもしくはパウロの形をとりつつペテロとなるのだ。

マテウス・オスヴィツキーは両てのひらを耳に押し付けた。それほどまでに多くの声が頭に響いてくる。目を閉じる。映像過多。記憶ではなく、前史ではなく、それはいまここ、礫になった者を前にしてここに自分が座しているように、いまあるものなのだ。この腹に燃えるものと同じ「いま」。不安はなかったが、大きな試験、重い使命の前のような湿っぽくかじかんだ感じだけがしていた。一度だけ受けられる試験、それは最重の試験だ。再び目を開け見上げる、そして救済された者の脇の傷痕に視線を向ける。

実のところマテウス・オスヴィツキーは手に掛けた者たちをうらやましく思っていた。彼らはもう「済まして」いるのだ。

立ち上がり石造りの教会から出る。ホテル・アトラスの前で踊っている青色警告灯の方を一瞥するとゆっくり、うなだれた頭で、額に深くフードをかぶせ、雨の中を聖カトリーヌの地下鉄駅へと歩いていった。

ホテル・アトラスに着いたアロイス・エァハルトは最初入館を断られた。少なくともホテル玄関前で一人の警察官から差し向けられた手を「止まれ」の意に取った。警官が何と言ったかは分からない。フランス語には不自由していた。

遠くからでもすでに警察と救急車の青色警告灯が回っているのが見えていた。自殺者が出たな、と思った。ゆっくりホテルの方へ向かいはじめる、すると昼にとらわれていた感情がまたもや見出された。遅かれ早かれ人間だれしもが落ち込んでゆく先の無、というものが突然、予告かまた催促でさえあり得たか、胸郭そして腹腔に広がっていくようなのだ。輪郭を持った肉体の覆いに育つ無がおわりなく延びてゆく。こんな不可能事がこわばり、息も絶えつつ感知された。魂は黒いものと感ぜられた。自分が生涯こ

なした経験のすべてを吸い込み消してしまう。その先には無が、絶対の空(くう)が。黒々と、星を欠いた夜がなお示す寛大さもなく。

ホテル玄関口への段々を前に彼はいま立っていた。骨は痛みにきしみ疲労に筋肉を火照らせて、自分の後ろに数えられるほどの野次馬がいるなか英語で、自分はこのホテルの宿客であること、ここに一部屋借りていること。それを言ってもさし延べられた腕に変わりはない。状況があまりにシュールに感じられてきた。自分がたったいま逮捕されることがあってももう不思議と思うことはあるまい。ただ、自分は体が言うことを頑としてきかなくなり始めている老人というだけでなく、れっきとした名誉教授、半生にわたり権威をなしてきたエァハルト博士なのだ。観光客です。意を決してやっと言う。自分は観光客なのです。ここ、このホテルに。自分の部屋に行きたいのです。それから職員にロビーまで引率され、二メートルはあろうかという男に引き渡された。五十代も半ば、あまりにも窮屈な灰色スーツに身を包んだ男が身分を証明せよと催促する。

教授はなぜ頭をうなだれて立ちすくんでいるのか。この大男の、はち切れんばかりのガス腹が目に入る、すると突然同情の念がわいてきた。ぎっしり詰まった肉体というありさまにおいて永遠に健壮に見えてしまう人間もいるものだ。いつまでもグッドコンディションで病気の気も絶えてなく、それが突然雷に打たれたように横たわるときがくる。まだそんな齢じゃないのに、といわれるような齢で死んでしまうのだ。自分の体を他人に対してそびえたたせ振りかざしていられる間は、いつも自分の体質を看板に自分のことを不死身に思ってきた。自分たちが老いて慢性的な病に陥ったとき、それからそう遠くない間に要介護となるやもしれないのにこういった人間はその際どうしたら、などという問いに正面切ってあたることはなかった。自分では知らないだけで、この男は体の本当の芯では腐朽していてやがてくたばるだろう。

エァハルト教授は男にパスポートを渡す。

いつお着きに？ Parlez-vous français?（フランス語話せますか？）ノー？イングリッシュ？ホテルをお出になったのはいつ？一九時から二〇時、ホテルにおられましたか？

なぜそういったことを聞くのです？

殺人捜査班です。このホテルの一室で男が一人射殺されておりまして。

右の前腕が痛い。エァハルト教授は思った。こう腕を撫でさすり、押し揉んでいるのがそれだけで怪しいと思われたのだろう。

レインブレーカーのポケットからデジタルカメラを取り出し電源を入れる。どこに居たかは証明できる。写真にはそれぞれ彼がいつ撮ったかが表示されている。

男は微笑む。写真を一通り見てゆく。午後ウロップ地区、シューマン広場。ベルレモンにユストゥス・リプシウス。街路標識「ヨーゼフ二世通り」。なぜこの街路標識を？

私はオーストリア人なので。

ああそうでしたか。

ロワ通りの彫刻「夢・欧州」。台座から空（くう）へと一歩踏み出す、盲目の（あるいは夢遊病の？）男の銅像。観光客とはずいぶんいろんなものを撮るようですね。ここだ、一九時一五分、グラン＝プラス。一九時二八分までここで何枚もお撮りになったんですね。そして最後の写真、二〇時四分、サントカトリーヌ教会柱廊。男がさらにボタンを押すと最初の写真がまた出てきた。戻る。キリスト、祭壇、その前のベンチに一人の男、背には「ギネス」。

男はにやりとして写真機を返す。

自室に入るとアロイス・エァハルトは窓辺に寄った。雨が降るのをガラスを通り越して眺めやり、濡れた頭をかきなでつつに耳を澄ましてみる。何も聞こえはしない。昼頃着いたときにはすぐ窓を開け、広場へのより良い眺望を得ようと前かがみに乗り出すことさえした。前かがみあまりにせり出し過ぎて危うくバランスをうしなうところまできていた。足下に床はなく、すでにアスファルトが自分に向かってくるのを見ていた。バランス喪失の感覚から落下の実感まではあまりにも早く、体を後方へ突っぱねて床に転倒、そこで右の前腕を暖房にぶつけ、馬鹿みたいな姿勢で地べたに尻をついていた。この態勢でもたったいま回避したはずの戸外転落の最中であるかのような感じが、おそらく死ぬ前一秒に覚えるそういった感じがしていた。そこから身を引き揚げ寝台に移し、息も絶え絶えとしていると「自由だ」、という多幸感が突然やってきた。まだまだ、自分で事を決めら

れるのだ。そうであるし自分は実際決断をすることになるのだ。いまはまだしない。だが然るべき時には。自殺者、とは馬鹿な言い方だ。自己規定者、自由な人間。これだ。自然の成り行きでせざるを得ないということを知っている、そして突然、出来る、ということもが知っている事として見出された。死、とは今自分に明瞭になったことには陳腐であり取るに足らずおさだまりのものであり、議事日程の最後に来る「その他」の点と同じようなものだと。それは何もそれ以上にやって来ない瞬間であった。死ぬことを自分は当然跳び越えねばならなかった。跳ぶのだ。

妻のようには死にたくなかった。終局において助けもなく、ただ彼が……してくれることを頼る他なく――。

リモコンをとりテレビをつけた。シャツを脱ぐ。右腕に青あざがあるのに気づく。リモコンのボタンを押す。次の局！ズボンを脱ぐ。次の局！靴下。次の局！ズボン下。次の局！――チャンネル・アルテに行き着く。劇映画、古典的なやつがひとつはじまったところだった。『地上より永遠に』。この映画を見たのは何十年かになる。ベッドに身を横たえる。アナウンス：「この映画はシェアナンバーワン結婚情報サービス、パートナーシップ・ドット・デーエーの提供でお送りします」。

救急車が広場に曲がり込みサイレンが聞かれたまさにその瞬間、フェニア・クセノプルが救急＝救出について考えていたこと、これは偶然ではなかった。それ以外のこと、もう何日も考えていなかった。自分にとってもうただこれが固定観念と化すなか、「救急！私を救急しに来たんだわ！」と今も思ったところだ。

ホテル・アトラス真向いのレストラン・メネラウスに夕食のため、カイ＝ウーヴェ・フリッゲと同席していた。彼のことは二年前の短い色事以来内々「フリッズ」と呼んでいたがその際、ドイツ人だからといって勝手に「フリッツ」に改悪していたのか、彼一流の即物具体の流儀が冷たく感ぜられたのを「フリッジ」、冷蔵庫と当てこすっていたのか、あだっぽく判然としなかった。フリッゲ。のっぽで敏捷四十代半ばの男、ハンブルクから来て十年来ブリュッセルにいる。塹壕戦、陰謀奸策、交換貿易など新しいメンバーでの欧州委員会発足に自然先立つこれら様々において運に恵ま

れ（もしかしたらまさしく自分自身の運に身を任せることがなかったためかもしれないが）めざましい栄達を遂げていた。彼は今では貿易総局局長であり、ということで連合において最も権威のある委員職の一つを持つ有力長官なのであった。

この一流レストランであふれる街で二人が、わざわざどちらかというと並と判明することになるギリシャレストランで会うことになったのはフェニア・クセノプルの希望というわけではない。ホームシックもなく郷土料理の味と香りをすがり求める気持ちもなかった。カイ＝ウーヴェ・フリッゲが提案してきたことだ。半国家財政破綻、そしてＥＵ側からのべらぼうな額の救済措置を経た「ギリシャ人たち」が同僚そして世間一般の冷たい視線にさらされている今こそ、自分に近いギリシャ人同僚に連帯の印を与えておきたかったのである。「メネラウスはどう？ヴィユ・マルシェ・オ・グラン通の、聖カトリーヌのところの、どうやらとてもおいしいギリシャレストランらしいよ！」とメールで待ち合わせ場所を提案した時には自分の得点を確信していたし、「オーケイ」と返事ももらっていた。彼女自身にとってはどうでもいいことだった。自分はいまさら愛国心などにかかずらうにはすでにあまりにも長い間ブリュッセルで生活と仕事をしてきてしまったのだ。今自分が求めるのは救出。自分自身の救急救出。

ギリシャの財政破綻を防ぐための基金を救急傘と呼ぶことなんてもう滑稽だ、フリッゲは言う。まぁ、比喩なんてものは我々のうちではのるかそるかの博打という具合でさ！

フェニア・クセノプルには寸分も面白くなかった。彼が何を言おうとしているのか全く理解できなかったが笑い顔を輝かせておく。こうすると仮面のようだ。自分でも確信が持てないことには、「作ったところ」が気づかれるのではないか、いやまだ功を奏しているのか、かつてはいつでも当てにすることができていたのだが。顔面筋、タイミング、まばゆい白の歯そしてあたたかな眼つき、これらを巧みに導入することで抗いがたい素直さの印象を与える像を成すことができたのだ。人工というものに関してでさえ自然的な才を持たなければならない。しかしフェニアは自身のキャリア上のきつい曲がり角のせいで、それも四十にもなったこの齢で取り乱しており、自身の自然的才、つまり意図的に相手の気に入るということに関

して、自分でももはや確信が持てていなかった。自己懐疑というものが、まるで乾癬のように自分の現れを覆っている、そう感ぜられた。

カイ＝ウーヴェはグリークサラダしか頼んでいなかった。フェニアのまず最初に思いついたことといえば、「私も同じのをもらうわ！」と言うことであった。しかしそれから聞いた自分の声はギュヴェチを注文していた。ぬるく、脂がしたたっているものが出てきた。自分を制御できなくなってしまったのはなぜだろう。体のプロポーションが崩れ始めていた。気を付けなくてはいけなかったのに。給仕がワインをつぎ足してきた。ワイングラスを見つめて思いなす、また 80 カロリー。水をすする、力をふりしぼってカイ＝ウーヴェを見つめる。ワイングラスを両手に下唇に押し当てつつしたりげな、同時に誘惑の面持ちをと努めた。私は一体どうしてしまったのか！心のうちで呪いの声をあげる。

救急傘！カイ＝ウーヴェは言う。ドイツ語ではそういった新語ができる。三回もフランクフルター・アルゲマイネ紙に載りさえすればそれでもう教養があるやつにはまったく普通に思えてくる。そうしたらもう取り除くことはできない。女首相はどのカメラにも面と向かって口にする。翻訳家たちはまったくごりっぱに汗をかく。英語・仏語には救命浮き輪と雨傘ならある。しかし、「救急傘」とは何ですか？ときたもんだよ。フランス人はとりあえず「落下傘（パラシュート）」と訳した。そしたらエリゼ宮から抗議だ。落下傘は転落を妨げることはできない、せいぜい長引かせるだけだ。これは間違った標識だ、まったくドイツ人にはお願いしたいのだが……。

彼がオリーブを口にし種を皿に置くのを見ていると、どうもオリーブの味だけを吸い上げてカロリーの方は皿に送り返しているみたいにフェニアには思えてきた。

そこでサイレンの悲鳴が聞こえ始め、青色警告灯が青、青、青青と。

フリッズ？

うん？

あなた――喉先まで声が出かける、私を救出してよ。しかしこれはまずい。自分で訂正を試みる。私を手伝って。いや、自分は学識も経験もある、世話がやけるような感じではいけない。

うん？彼はレストランの窓から彼方、ホテル・アトラスの方を見やる。救急車から担架が出てくるのを、人員がそれでもってホテルに駆け込むのを見る。メネラウスがホテルに近いと言っても距離は依然、彼が死を連想するのを妨げるほどには大きかった。ここから見ているとただダンスの振り付けの様で、人間が光と音に合わせて動いていた。

あなた――すでに彼女は口にだしていた、言葉をなかったことにしたかったがもはや遅い――……分かるでしょう……ねえそうでしょ、あなた分かってるの、知ってるのよ、私が――

うん？彼女を見つめる。

パトカー、響きあうサイレン。

最初フェニア・クセノプルは競争総局で働いていた。局長であるスペイン人本人には心得も憶えもなかった。とはいっても局長というのは、各々が構えるオフィス程度のものでしかなく、フェニアは完璧な機能ぶりの一オフィス、その優れた一部分として目立つ存在であった。離婚をした。二週末ごと、のちには三、四週末ごと、一人の男をブリュッセルのアパートに座らせておくか、こちらからアテネまで訪ねていくことなどに費やす時間も気力もなかった。その男はアテネ社会に関する、なにかごく個人的な事柄についてしゃべりたてその際、成金の戯画のようにタバコをぷかぷかやるのであった。彼女は花形弁護士と結婚していたのだが、それも田舎弁護士にすぎなくなり、家から放逐したのだった。それから階梯を一段上がり、貿易総局局長の官房に入った。貿易部門では貿易制限を粉砕することで功績が得られた。自分にはもう私生活などなく、自分を縛る鎖もなく、あるのは自由世界貿易のみであった。目の前に見えるキャリアは、世界の改善に関与した自分に与えられる報酬ということになるのだろうと、本気で思っていた。フェア・トレードとは彼女にとって同義反復であった。トレードとはグローバルなフェアさの前提条件なのだから。局長のオランダ人には良心からのためらいがあった。信じがたい穏当さだった。局長のためらいが何ギルダーの価値があるのか算出すべくフェニアはハードワークをした。氏は実際いまだにギルダー〔訳注：オランダの旧貨幣〕で計算をしていのだ。フェニアに説得されたことによって氏が得た月桂樹には金（きん）の価値があったのだ。いまや次なる跳躍が待たれていた。欧州選挙の後、新

委員会発足の際の、さらなる昇進を期待していた。そして実際、彼女は昇格した。部局をひとつ任されることになった。何の問題があるというのか。この昇格はステップダウン、キャリア上のきつい曲がり角、左遷と受け取られた。C（「コミュニケーション」）部門の指揮を、文化総局において任されることになった。

文化なんて！

勉強したのは経済学、ロンドン・スクール・オヴ・エコノミクス、スタンフォード大卒業生、選抜試験に合格、その挙句文化におさまる……。これではモノポリー・ボードゲームほどの意味もない！文化、は重要な部局ではない、予算もない、委員会での存在感も、影響力も権限もない。同僚たちは文化部をアリバイ部局と呼んでいた。少なくとも本当にそうであってくれたらまだ良かった。アリバイは重要、何事も行為にはアリバイが必要だ。しかし文化というのはまやかしですらないのだ。注意を引きつけてごまかそうにも、文化が何を成すのかわざわざ見に来る目、それすらないのだから。貿易局長もしくはエネルギー局長、いや魚釣り部局女性局長でさえもが委員会中にトイレに立つのなら議論は中断され復席が待たれる。しかし文化担当女性局長が席を外さなければならないとなっても交渉は気にせず続けられる。それどころか自分が交渉の席についているのかトイレに座っているのか、まったく人目を引くことがなかった。

フェニア・クセノプルはエレベータに乗っていた。上にあがることは上がったのだが、いつのまにか二つの階の間で止まっている。

出してよ！と言った。トイレから帰ってみると彼は電話をしていた。待ってはくれていなかったのだ。

フリッズとフェニアは大窓を通してホテルの方を見やった。ようやくの二言三言のきっかけとなる何事かが起きたことを喜んでいる、年を経た夫婦のように押し黙って。

どうしたのかしら。

さぁ。多分誰かホテルで心筋梗塞でも起こしたんじゃないか、とフリッズ。

でも心筋梗塞ひとつのために警察が駆けつけることないじゃない！

そうだね。と彼は言う。それから小休止あって言いかける。ハートと言

えば、君の性生活はどんなもんだい？問いをかみ殺す。

君の方は何か心にかかるものがあるみたいだね。と言った。

そう！

全部話してくれていいんだよ。

彼は耳を傾けうなずきに頷いた。延ばした「オーケイ」を時折言い、自分が話を追っているということを示し最後に、何かできることはあるかな、と言った。

私を局に引き寄せて。できるでしょ、ねぇ、引きぬいてよ。貿易に戻りたいの。それかクノーと話つけてくれる？彼とはよくやってるんでしょ。あなたのいうことなら聞くわよ。多分どうにかしてくれるでしょ。文化とはおさらばしたいの。窒息しちゃうわ！

そうだな、と彼は言い、突然不安を覚える。といってもおそらく言葉が大袈裟すぎた。自分でも説明のつかない重く鈍い胸騒ぎを覚えたにすぎない。自分の人生について、あらためて感慨にふけることなど今までなかった。昔いつか自分の人生について感慨にふけったことはあった、本当にたいぶ昔のことだ、まだ人生経験皆無の、その頃のことだ。空想夢想の類だった。夢想と思案を取り違えていた。自分が夢想にふけっていた、などとは誰にも言わせまい。自分は、普通の人が定められた駅のプラットホームに行くように、そちらの方へ、定められた目的地への旅が始まるまさにその地点へと行ったのだ。それからは線路暮らしだ。脱線しないでいられること、それにしたって時として好運のたまものにすぎない。そのことは彼も内で承知している。しかし、線路上にあるかぎり、あらためて感慨にふけるべきものは何もなかった。人生。うまく運ぶかうまく運ばないかだ。もしうまく運んでいれば、主語は「人生」ではなく「自分」にかわる。自分がうまくやっているのだ。こんなことはすべて考え出すまでもなく、自分にとってはただ自明のことだった。この自明さと、自分が一歩ごと立ち止まって感慨をなす必要もなく進んでいくところの、確実安全な地盤とを取り違えていた。しかしいまやこの地盤にあってわずかな揺れが生じている。なぜ。自分で問うことはしなかった。感じたのはこの重く鈍い胸騒だけ。今度は俺がちょっとトイレに行ってくるよ。

手を洗い自分を鏡に見る。自分自身はよそよそしいものではなかった。

よそよそしくはない、とはまた、見慣れていない、ということでもあるのだが。財布からバイアグラ錠剤を取り出す。いつも一つは常備していた。噛み砕き水を一飲み、それからもう一度手を洗った。

ちょうど自分と同じようにフェニアが明日とても早く出なければならないことを知っていた。つまり二人すぐにでもベットインしなければならない、ということ。二人とも「発揮」できなければならないのだ。

二人はタクシーでイクセルへ、彼の部屋へむかった。彼は欲情を演じ、彼女は絶頂を演じた。化学的には正しく反応が出た。一方の通りのバー・ル・セルフ・ブルの電光掲示板が窓を通して青く瞬いている。カイ＝ウーヴェはもう一度立ち上がってカーテンを閉めた。

そこ、窓のところに男が一人佇んではいないか。黒き報復者。幻影。影男。空き家の壁に描かれた漫画のキャラクターのように見える。ホテル・アトラスから見てはす向かい、ド・ブレ通りの角にあるこの建物の窓はすべて暗く、店舗ショーウィンドには板が打ち付けてある。板上に半ばはがれた張り紙やぼろきれがはためいている。脇の壁上には落書き、スプレーで吹き付けられた単語、読解不能――装飾、暗号、シンボル？物件の前には板囲い、上に解体業者「デ・モイター」の看板。もちろん、廃屋二階の窓の四辺に縁どられたこの黒い図が落書きなどではないことをブルンファオト警部は分かっている。だがそう見えてしまうのだ。この都市（まち）の隅々といたるところ外壁と防火壁は、屋根に至るまでエルジェやモリスといった作家の漫画、図のコピーやらヴァリエーションやら、ボノム作の動物、はたまたこういったアーティストの後任を自負する若者たちの手になる作品を塗りたくられている以上は。ブリュッセルが開かれた本であるというのならそれはコミック本一巻というところ。

ブルンファオト警部はホテル・アトラスから出て、車内待機の同僚たちに近隣を訪ね廻って、件の時間帯に偶然窓から覗いて何か見た人がいやしないか聞きだすように指示を出すところであった。

新年幸先良好ですな！警部。

毎日が幸先良好ってもんよ。雨はすでに止んでおり警部は大股開きで佇む。ウエストバンドを引き上げ、野郎連中と話している間もこちらに面し

て広がる家屋のファサードに眼差しを泳がせてゆく。そうしているうちに見たのだ。窓に枠どられた影画を。

確かに男がひとり窓に立っている。解体途上の家屋の窓にである。警部は見あげ、そいつを凝視する。男は動かない。本当に人間なのだろうか。人形ではないのか。影の輪郭に騙されているだけなのか。やっぱり落書きなのか。警部はニヤッとする。心中でのことで、実際に表情が笑ったというわけではもちろんない。いや、やっぱり誰か立っているじゃないか！下を見渡しているのか。俺が自分のところを見上げているのが分かっているのか。何を目撃したというのだろう。

行け、仕事だ。警部は言う。お前はこの家、お前はあっち、そんでお前は……。廃墟もですかい？見ての通りですぜ。

廃墟もだ。上を見てみろ。

その瞬間影男は消えていた。

窓から後ずさる。たばこはどこだ。多分コートの中だ。コートはキッチンチェアの上だ。この住処にまだ残っている唯一の家具である。ダーフィット・ド・ヴリアンはキッチンへ行きコートをとる。自分は何しに来たんだ？コートをとりにだ。何故コートを？意志不明のしどろもどろで立ち尽くしコートを見つめる。もう行く時間だ。ここにはもう何もない。何も用は。住処は完全に空になった。壁の上の四角を見やる。絵がひとつ掛けてあったところだ。「ボールツメールベークの森」、牧歌的な風景画であった。まだ思い出すことが出来た、自分でこの絵を掛けたことを。一生涯もの間この絵を目前に控えていたが、それもある時点で見ることがなくなった。そして今見るのは空白である。最早ここにない、何ものかがここにあったということが分かるだけである。前史の上にすでに貼り付けられていた壁紙、その上の空（くう）のシルエット。これが生の歴史（レーベンスゲシヒテ）＝伝記（ヒテ）というものか。そこに立っていた戸棚の輪郭も下に見える。何をその中に保管していた？自分の人生においてたまってきたもの、後にのこる汚物。それが今あらわになっているだけだ。ほこりの塊、脂ですすけた、カビっぽいヨゴレの跡。一生涯キュッキュッと磨いていることもできる。とにかく自分の人生を一生懸命磨いてみること。それでもさっぱり片付けたその終いに残っ

ているのは汚物だけだ。磨いた面、研磨したファサードすべての後に残る。若い時分であっても、まだ何も腐れてカビを生やし、朽ちていないなどとは思わぬことだ。突然自分の生が片付けられてみればそれは明らかになる。若いといって、生からまだ何も、ほんのわずかしか受け取っていないとでも思っているようだが、後に残る汚物はやはり自分が一生涯ため込んだ汚物なんだぞ。残るのは汚物だけ。自身汚物なのであるし行き着くところ汚物の中に産み捨てられた存在であるからだ。それが生きながらえて歳をとるのだとしたら、おめでとう。しかしぬか喜びもそれまで、賜った一生涯をかけてキュッキュッと磨いてみたとしても、片付けられた終いに何が見えてくるというのか。汚物である。あらゆるものの後ろ、あらゆるものの下にあって、自分で磨いてきたあらゆるものの基盤であったのだこの汚物は。清潔な人生。そういったものを賜ったわけだ。それも汚物があらわになるまでのこと。そこには流し台があった。彼は絶えず洗い物をしてきた。食洗器を持ったことはない。皿もカップもすべて使ったらすぐ洗うようにしていた。ひとりでコーヒーを飲むとき、彼はそう、ひとりだった。ほとんど常にひとりだった、そうである以上コーヒーも立って飲んだ、流しのすぐそばで、そうすればすぐさまカップを洗うことが出来る。最後の一ふくみを飲み下して蛇口をひねる、これはいつも一続きのことであった。すすぎ、乾かし、光沢が出るまでふき取り、最後にカップをもとの通りに並べて置く。こうすればすべて清潔になる。このことが彼にとって重要なのであった。清潔な生活。そしてそれから、流しがあったところ、そこにいま何を見る？腐敗、糸状のカビ、あれこれの条痕、汚物だ。暗闇でも薄明でも汚物はそれと分かる。もう何も残っていない、全て片付いた、なのにそれでもまだ見える磨かれた生の後の汚物痕。

再びコートをチェアに掛ける。しようと思っていた、何を？見回りを始める。何故自分は出て行かないのか。出なければならない。走り去るべきなのだ。自分が生きてきた住処ではもうないのだ。ただこれまでの生活があった部屋々々というのに過ぎない。もう一巡する。何のために？空 - 間を見つめて何になる。寝室へ行く。ベッドがあった場所の板張りはくっきりと四角く白ざめており、薄明りの中では大きな落とし戸のように見えた。この四角の脇を窓の方へと過ぎてゆく。何故その上を踏み越えなかったの

か。何故この空の部屋でカーブをするのか。まるでこの四角が本当に開いて彼を飲みこみでもするといったような不安を抱えているようだ。不安はない。ここにはいつもベッドがあった。今までの生活でベッドをぐるりと避けて窓へ向かったように、扉から窓へ向かっただけだ。外を覗きやる。ほとんど手の届く距離に隣の学校の非常用梯子がある。一年に一回警報テストがある。サイレンがとどろき、生徒たちは素早く列を乱さず非常用梯子を下る訓練をする。どれほどダーフィット・ド・ヴリアンはこの窓に立ちこの訓練を眺めたことか。避難。訓練。手の届く距離にある。このことははっきりしている。引っ越し当初からこの梯子は手の届く距離にあった。この梯子は当時、彼がこの部屋に決めることになった要因でもあった。この部屋はとても立地が良いです、と不動産屋は言っていた。そこでド・ヴリアンは窓から非常用梯子眺めて頷いた、うむ、立地はよい！必要とあらばこの窓からひと跳び、ドアから玄関にノックが響いている先から非常梯子で逃亡することも出来よう、などと考えていた。それくらいはできる、間違いなく、機会があればやってのけただろう。それが今日になってみれば――、考えられもしない。今や梯子は手の届く距離にはない、到達不能だ。半世紀前からというものの、ここで避難訓練をする子供たちは常に同じ歳で子供は子供であった一方、彼は歳をとっていき、終いには歳をとりすぎるところまでゆき、虚弱にして足腰もろく、訓練からは除外の身となった。窓から見やる、そこで分かる、もう手の届くところではない。そうだ、たばこを吸おうと思っていたのだった。もういい加減行かなければ、逃亡だ――廊下を通って行く先はしかし、たばこが入ったコートがあるキッチンではなく、リビングであった。意志不明のしどろもどろで立ち尽くす、探すように見回す。空 - 間がひとつ。やろうと思っていた――ここでまだ何をしようというのだ。窓辺へ行く、そうだ、もう一瞥しておくのだこの広場を、彼が賜った一生をかけて自分の「居場所」を見いだそうとしたこの広場を。

青色警告灯のほうを見下す。彼は何も思うことはなかった。寒い。何故かは分かっている。自分がそれを知っていてかつそれがそれ以上思考に値しないものであるなどとは考えもしなかった。彼の内に差しはさまれてある、旧知というもの。わざわざ頭の中で明文化される必要はなかった。身

じろぎもせず数台のパトカーを下に眺める。心臓が縮み上がり、また広がる。魂の肩すくめ。

まだ教師だったころ、このような、「*彼はこう思いました、云々……*」を生徒たちの作文に見つけてはいつも放逐しようとしていた。

奴らからこれを放逐することはできなかった。子供たちは、人間ひとりでいるとき「*彼は／彼女は思いました*」構文を絶え間なく頭に抱えているとでも思っているのだ。そしてこういった「*彼は／彼女は思いました*」頭同士が出くわして「*彼は／彼女は言いました*」構文が生産されるのだと。本当のところ、神も不在であけすけな青空の下では、それぞれの頭は底に至るまで信じられないほど静かなものなのだ。我々のおしゃべりはこの静けさのエコーに過ぎない。寒々と彼の心臓は縮み上がり、また広がる。息を吸っては、吐く。青い光が点滅するのに合わせて。

そこでベルが鳴るのを聞く。それから拳が玄関ドアに打ち付けられるのを聞く。キッチンへ行きコートをひっかける。寝室へ行く。再三誰かが外からドアをたたく。ダーフィット・ド・ヴリアンは窓辺に寄るときにまた小カーブをする。外を見やる。手の届く範囲をではない。床に座り込む。たばこをふかす。ノック。拍。

原文書誌は、以下の通りである。

Menasse, Robert: Die Hauptstadt. Suhrkamp Verlag Berlin 2017.

ロベルト・メナッセ『首都』 紹介と留意

菅谷　優

本稿は Menasse, Robert: Die Hauptstadt. Suhrkamp Verlag Berlin 2017 の抄訳である。日本においてほぼ未訳未紹介の作家・作品である性質上、まず簡潔な紹介を付す。

Robert Menasse　ロベルト・メナッセ　1954 年ヴィーン生まれ、オーストリアの作家、政治エセイスト。ヴィーン、ザルツブルク、メッシーナ（イタリア）で哲学と政治学を学ぶ。1976 年創始者の一人として学生同人誌『散巡ゲルマニスト中央機関紙』Zentralorgan herumstreuender Germanisten を開始。1980 年『タイプとしての文筆業におけるアウトサイダー　ヘルマン・シュラーを例にして　オーストリア第二共和制における公認文筆業と「アンダーグラウンド」文学の独特な関係についての研究』によって博士号を得る。1981 年から 1988 年の間ブラジル・サンパウロ大学においてオーストリア文学についての講師、招聘教員として教鞭をとる。ヴィーンへ帰国後はフリーランスの作家兼ブラジルポルトガル語の翻訳者として活動。ブラジルでの講師体験は、ヘーゲルの『精神現象学』の読み替えの試みである 1996 年の小説『感覚的確実性』Sinnliche Gewißheit の素材として日の目を見ている。

2017 年ドイツ書籍賞を受けた『首都』は、世界で初めて EU ＝ヨーロッパ連合を扱った小説として批評家たちによって称賛される。物語が登場させるのは、創立記念日に向けて欧州委員会（拠点をブリュッセルに置く）のイメージをクリーンにするという課題を受けた委員会文化部門の役人たちである。アウシュヴィッツ強制収容所の生存者たちを招いての「記念式典ビッグプロジェクト」によってこの課題は果たされる方向に一応は向かう。欧州委員会の役人たちのほかに焦点に立つのは、いまは教師を退職して老人ホームにいるアウシュヴィッツの生き残りであるユダヤ人の老人、農業・畜産の圧力団体を主宰するオーストリア人大養豚業者、ある殺人事件を解明しようとするベルギー人警部、ポーランドからの暗殺遂行者など

である。人物たちの生の物語は六つのEU加盟国へと広がっていく。この小説の端を切り再三モチーフとして回帰することになるのがブリュッセルの街中を走り回る一匹の豚である。この「幸福の象徴としての豚からふしだらなメス豚まで」、「ユダ公、ナチ野郎」など、両義性の担い手の「走行」によってメナッセは、小説中の登場人物、彼ら自身読者と同じくいかなる連関・布置の下にお互いあるのか知らされていない「役者たち」を小説の時空につなぎとめようとする。イスラム教において不可食である豚、中国に市場を奪われて行く畜産業における豚は舞台である欧州を地理的・文明的境界によって輪郭付けもしている。

先に述べたようにメナッセは日本においてほぼ未訳・未紹介の作家である。2001年に朗読会が行われたのと、明治薬科大学研究紀要〔人文科学・社会科学〕2017年第47号所収の宗宮朋子「世界初のEU小説――ローベルト・メナッセの『首都』」によって一度言及されたきりである。英国の脱連合の決定をはじめ、特に21世紀に入ってからEUというヨーロッパ諸国間の結合の、組織運営の在り方など、揺らぐ時局に合わせた創作であったことは自明であるが、連合本拠地であるブリュッセルに四年間住み込み、実地で組織の人間たちに取材を重ねていたということから、そのマクロな時局タブローの裏を渦中の組織の人間たちの仕事・日常から成るモザイクで縫い直す、というように実際の詩作を定式化することができよう。「左派・政治エセイスト」という肩書から容易に引き出せる類の動機には事欠かない。

宗宮氏の紹介論文にあるところでは、バルザックの「自分の同時代人が自己を認識できるように、後世の人々が我々を理解できるように物語れ」、という言をモットーに当小説は書かれたという（宗宮 61-62 頁）。メナッセの小説にも「群像劇」という形容が容易に付されようが、バルザックの『人間喜劇』は紛れもなく七月王政期（19世紀前半）のパリに関する「都市文学」であるのに対し、『首都』という名を冠する当作品の輪郭にはある種のあいまいさが付きまとう。街路描写・風俗描写にパリという区切られた地域性を浮かび上がらせるバルザックの言から件のモットーを抽出することには一考を要する。メナッセの『首都』において、ブリュッセルはこのような地域性の輪郭に物語を収めることにはほとんど機能しておら

ず、ヨーロッパという漠たる限定性を伴った歴史の持続から切り出された共示性・空間、端も見えずどこまでも広がっていくように思われる一枚の平面において点滅する一つの特異点を形成するにすぎないのだ。ヨーロッパの「現代史」的な集約の系譜、『パリ――19 世紀の首都』（ベンヤミン）、『プラハ、二〇世紀の首都』（デレク・セイヤー）などの言説に身を置く読者があるとすれば、「ブリュッセル、21 世紀 EU（ヨーロッパ）の首都」なるものを予期したかもしれない。しかし「首都」Die Hauptstadt という一般名詞は劇中、「（地）名」による横滑りを受けることとなる。イタリアそしてキプロス（ギリシア）をはじめとする南欧、オーストリアとチェコという中欧を北と東に越えてポーランド、ハンガリーと、当初の舞台装置であるブリュッセルに偶然居合わせた登場人物ら自らの出自や目前の利害に沿って小説のシークエンスを飛散させていく。「現実に事柄同士の連関なんてある必要はなく、かといっていざなくなったらすべてが崩壊するだろう」„Zusammenhänge müssen nicht wirklich bestehen, aber ohne sie würde alles zerfallen“ ／「何かバラバラに倒れるものがあるとすれば、事柄同士の連関がもともとあったはずである」„Wenn etwas zerfällt, muss es Zusammenhänge gegeben haben“、というのがそれぞれ第一章、第十一章に掲げられているモットーであるのだが、この物事・人物が飛散するなか、そこから彼らが飛散するところ、このもともとあったはずの「連関」は「アウシュヴィッツ」という地名によって名指される。そもそもポーランド語を含む多言語が渦巻くこの小説において、ポーランド語表記の「オシフィエンチム」がなぜ登場しないのか。仔細は省かざるを得ないが一つ留意点を挙げておく。欧州共同体の「反省的起源」としてメナッセは「アウシュヴィッツ」を指し示し、その際、本小説そしてその他講演等で初代欧州委員会委員長ヴァルター・ハルシュタインの 1958 年アウシュヴィッツでの就任講演を引き合いにだすのであるが、この講演自体が作家による捏造であることがほぼ確実である（フランクフルター・アルゲマイネ紙 2019 年 1 月 1 日の記事を参照）。作家のこのような振る舞いを「（心理的）治療の観点から感応 - 再習得された記憶のケース」„ein Fall von therapeutisch induzierter wiedergewonnener Erinnerung“ として看過すべきか否かは定かではない。少なくとも、現代的なるものの反省の、「神話的起源」としての「アウシュ

ヴィッツ」について考察するにあたって興味深い一ケースではあるだろう。

本作のごく一部であるプロローグと第一部を訳すにあたって、行動とそれぞれのエゴイスティックな思惑と妄執が入れ替わり立ち代わる「群像劇」の入り口としてどれほどの注意を引くことができているのか、心もとない。人物ごとの「ショット」の物理的な切り替わりがあるだけで、「事物同士の連関」は不在としても痕跡としてもいまだ顔をのぞかせてはいまい。しかし第一章の最後、新居である老人ホームに移る前で痴呆の気を示す老人が、強制送還から生き延びたユダヤ人であるという情報は読者のうちに何がしかの印象の変化をもたらしはしないであろうか。メナッセはいわゆる「ホロコースト第二世代」の作家であり、自ら迫害と収容の経験を持つわけではない。親世代直々の体験からの「再構成」を試みてしかるべき作家の一人が、いわばその「親」の位置にあたる人物に、何ひとつ汚点のない人生でありながら結局その「痕」には「汚物」しか残こすことがなかった、などと思わせている事態から我々は何を読み取るべきなのか。劇中この人物の「老後」は他の人物たちの生活となんら交わりを結ぶことがない。自ら記憶ももはや定かではなく、「子」に残す言もない。ただ強制送還の途上、列車から飛び降りる身体感覚、身振りだけが歴史をとどめている。それも「飛び降りた」という過去に遂行された動作としてではなく、「間違いなく、機会があればやってのけただろう」という決意と計画、未遂としておぼろげに意識されるのみである。本作において「アウシュヴィッツ」が今あらたに立ち上げられようとするのは、このような記憶の断片化および連関の喪失においてなのである。

（東京大学大学院　後期博士課程）